

<p>速報第3837号 R6.9.9発行 総務課 扱</p>	<p>道議会における質疑・質問及び答弁要旨</p>	<p>6年 文教委員会 9月9日</p>	<p>質問者</p>	<p>広田 まゆみ 委員 民主・道民連合 (札幌市白石区)</p>
<p>質 疑 ・ 質 問</p>		<p>答 弁</p>		<p>担 当 課</p>
<p>一 道教委による国際交流について 先日も総合教育大綱におけるグローバル教育について伺いましたが、今回は、道教委としての国際交流事業に関して、伺います。</p> <p>(一) 道教委における国際交流事業について 道教委の国際交流ポータルサイトによると、道教委として、カナダ・アルバータ州、アメリカ・ハワイ州、ニュージーランド、オーストラリア・タスマニア州、ロシア・サンクトペテルブルグ市、中国・北京市、アメリカ・マサチューセッツ州などの様々な各国、地域と相互の訪問やオンラインによる交流などが行われている。道として、姉妹都市連携のある地域もあれば、そうでない地域もあるが、この国際交流の地域は、それぞれ、どのような理由で選定されたのか伺うとともに、それぞれの直近の交流状況や、道教委が果たしている役割や、今後に向けた課題などの認識について伺います。</p> <p>(二) 覚書の必要性について 今、お話しいただいたように、また、交流地域の中で、覚書を締結している地域、していない地域が見受けられるようですが、この両地域の協力関係を若い世代に引き継ぎ、継続的な取組を将来にわたり進めていくことができるように、私としては、覚書の重要性があると考えますが、この覚書の重要性の所見を伺うとともに、今後、覚書締結の地域を増やしていく意思があるか伺います。</p> <p>(三) 道立高校における国際交流の事例について 次に道立高校の国際交流の事例について伺います。過去にも、グローバル教育に関し質問した際には、こちら側から海外地域へ留学することもたちの支援に関して、それを中心に質問させていただきましたが、今回は、逆に、日本に興味を持ってくれる若い世代と、いかに、北海道の地域の道立高校などをつなげるかについて、検討すべきであるという視点から質問させていただきませう。</p> <p>先日まで、北海道移住パラグアイ 85 周年・ブラジル 105 周年に道議会として派遣していただきまして、藤澤先生、稲村先生、副議長もご一緒させていただいたわけですが、パラグアイ、ブラジルそれぞれの日本語学校とも交流させていただきました。規模</p>		<p>(高校教育課長) 国際交流事業についてでございますが、国際交流の地域の選定に当たりましては、交換留学事業の場合、道の姉妹友好提携や道教委が覚書を締結しております国・地域と行っており、オンライン交流につきましては、学校の希望を踏まえ、友好提携先等以外の国・地域とも実施をしております。</p> <p>交流の実績といたしましては、昨年度は、カナダ・アルバータ州、ニュージーランド、アメリカ・ハワイ州と高校生交換留学事業を行い、本道から 20 名の高校生が短期留学し、相手側から 14 名の生徒を受け入れたところであり、また、オンライン交流につきましては、11 校の高校において、7 つの国・地域と交流の実施をしました。</p> <p>さらに、道教委と中国駐札幌総領事館、北京市教育委員会との共催による北海道青少年中国友好訪問事業の枠組みを活用し、16 名の高校生が、北京市におきまして現地高校生との交流を行いました。</p> <p>道教委では、交換留学事業の実施に当たりまして、留学先の学校やホームステイ先の選定、渡航費補助による経済的負担の軽減、留学前の事前研修会の開催などの支援を行っているところであり、課題といたしましては、相手先の受入枠の関係などから、留学を希望する全ての生徒に対応できないことや、提携先の国・地域の社会情勢が不安定な場合、交流の休止や再開の判断を必要とするケースが生じていることなどがございます。</p> <p>(高校教育課長) 国際交流に係る「教育分野における協力に関する覚書」についてでございますが、教育行政機関相互の覚書は、学校同士の友好協力関係の構築や生徒同士の交流活動を展開することへの支援、教育環境や教員の指導方法などの改善に資する交流を展開することへの支援、両者の担当部局間の交流と協力の強化等を目的として締結しており、生徒や教育者のグローバル的資質の発展に資するつながりや関係性を育成するなどの重要性があると捉えております。こうした考え方のもと、多様な地域と覚書を締結することは望ましいと考えますが、相手国・地域との合意が必要でありますことから、締結に向け、信頼関係構築のプロセスを積み重ねることが必要であると考えております。</p> <p>(指導担当局長) 国際交流の事例についてでございますが、日本語学校との交流実績としては、夕張高校が、パラグアイの日本語学校と ICT を活用したビデオメッセージの交換などの交流を行っており、また、日系人コミュニティとの連携については、美深高校が、ブラジルの北海道人会から紹介を受け、アルモニア学園とオンライン交流を行っており、相互の文化理解の促進に繋がっております。</p> <p>このうち、美深高校とアルモニア学園との交流におきましては、道教委の国際交流事業の枠組みによらず、学校が独自に相手校との交流を継続し、学校では、生徒の国際的視野が広がるとともに、自らの国・地域の文化へ</p>		<p>高校教育課</p> <p>高校教育課</p> <p>高校教育課</p>

質 疑 ・ 質 問	答 弁	担 当 課
<p>感は、それぞれ異なりますが、双方とも、現地の日本人会が運営をしていました。</p> <p>パラグアイのイグアス日本語学校は、小学生から高校生までの子どもたちを対象に、日本語能力試験の高いランクを目標に掲げ、教育を行っていました。パラグアイの公用語は、スペイン語と現地のグアラニー語であるが、多様な移民国家なので、実際に行ってみて、私も実はスペイン語で自己紹介の練習をして行っただけですが、実際に使ったところで、母語がスペイン語以外の子どもたちが半数以上いるなかで、日本語が共通言語になっているという、そういう環境の学校でありました。</p> <p>また、ブラジルのアルモニア学園は、日本語及び日本文化の時間もカリキュラムのなかに取り入れておりまして、バスを降りた瞬間から、さくらさくらの歌ですとか太鼓で大変温かい歓迎を受けたところです。美深町ともご縁がありまして、アルモニア学園の生徒が、美深町を訪れたり、ICTを活用した対話をしているとのことで、私どもがお邪魔した時も、それぞれの学校からのビデオレターの交換などがあつたところでもあります。</p> <p>まず伺いますが、日本語学校や、日系人コミュニティなどと連携している道立高校や、道内市町村の事例があるか伺います。</p> <p>また、美深高校からのビデオレターは、生徒が自ら、英語による動画を撮って編集したと思われるもので、手創り感がある温かいビデオレターでありました。</p> <p>道教委としては、こういうアルモニア学園と、美深高校の国際交流の意義をどのように認識し、今後、道立高校のICTを活用した国際交流をどのように応援するのか伺います。</p> <p>また、私としては、例えば、こうした国際交流を機会に、現場へのおしつけになってはいけませんけれども、簡単な動画の編集であるとか、あいさつだけでも簡単なポルトガル語、ブラジルの母国語がポルトガル語ですので、ポルトガル語の学習などを支援することなども重要ではないかと考えます。</p> <p>道教委として、国際交流にチャレンジする学校現場を支援できる人材の、少なくとも紹介ができる窓口ですとか、道教委自体が機能を持つべきと考えますが、現在の取組と、これからの課題などについても伺います。</p> <p>(四) ブラジル、パラグアイなど北海道人会のある地域との連携の強化について</p> <p>今、ご答弁があつたように美深高校とアルモニア学園の交流においては、道教委の国際交流事業の枠組みによらずに進められたところでありました。一方で、覚書の必要性に関して、多様な地域と覚書を締結することは望ましいと考えるけれども、まずは相手国・地域との合意が必要、信頼関係構築のプロセスを積み重ねることが必要というようなご答弁もありました。そうしたことも踏まえまして、ブラジル、パラグアイなど北海道人会のある地域との連携の強化について、ご質問したいと思います。</p> <p>今回、ブラジル、パラグアイを訪問して、お会いした日系人のみなさんは、北海道人会のみなさんは、多様性のある国家の中で、日系人としてのアイデンティティーを構築していくことに、とてもすごい強く取組を継続されていて、そのことにも強く感銘しました。</p> <p>また、南米移住の経験談を伺うと、一部、北海道「開拓」の歴史と重なるものもありつつ、それを超えるようなすさまじい苦労の連続から、地域で信頼を勝ち取ってきた歴史は、日本人として、北海道人としても、しっかり次世代に受け継ぎたいものだ、と、現地の北海道としても考えたところでもあります。向こうの諺があるそうで、西洋人が3人集まると教会を創るけれども、日本人が3人集まるとどんなに厳しい環境でも学校を創るという諺とか、慣用句みたいなものがあるそうです。一方、そういったブラジル、パラグアイの日系人社会でも歴史的な第二次世界大戦を含めた経緯や、家庭の環境などにより、日本語を使える人は少なくなってきました。現在も、JICAだとかHIECCなどの研修などで、ブラジル・パラグアイとの交流、技術研修は継続されていますが、教育の分野でもより強い連携が必要だと考えました。</p>	<p>の理解も深まるということに意義があると捉えており、道教委では、道立高校がICTを活用した交流を実施するに当たり、学校の要望に応じて交流先を選定し、紹介するなどの支援を行っております。</p> <p>道教委では、現時点で、国際交流をコーディネートする人材の活用実績はありませんが、今後、交流の相手国・地域の拡大を図っていく際には、異国の言語や文化を理解している人材を効果的に活用することなどについて、検討が必要と考えております。</p> <p>(学校教育監)</p> <p>多様な地域との交流についてであります。道教委が、現在、姉妹提携や覚書の締結により交流を行っております国・地域は、英語、ロシア語、中国語を母語とする国・地域であります。グローバル化が進展する中、地域や世界の課題解決に向け、主体的に取り組もうとする意志を持つ人材を育成するためには、高校生が、異文化交流や多様な価値観に触れる機会の創出を図るとともに、より多くの相手先との交流を拡大していくことについては、意義があると捉えており、今後も、知事部局等とも連携し、様々な文化や言語の国・地域との交流が実現するよう積極的に検討してまいります。</p>	<p>高校教育課</p>

質 疑 ・ 質 問	答 弁	担 当 課
<p>私としては、パラグアイ、ブラジルの北海道人会などや日本語学校と、道教委は、覚書を交わすなどして、ポルトガル語や、特に、スペイン語などにも興味を持てるような機会を、道内の高校生に対しても、北海道の未来のために提供すべきと考えますが、見解を伺います。</p> <p>(指摘)</p> <p>最後に、指摘ということになりますけれど、訪問団として、総領事、ブラジル総領事などにもお話した際に、特に北海道の発信について、ポルトガル語やスペイン語での発信が少し弱いのではないかというご指摘もいただいたところでもあります。私個人的にも、北欧などにお邪魔した際、日本語に興味のある現地の学生と交流の機会があったのですが、どうしても今、それはある意味素晴らしいことなんですけど、関心のきっかけがアニメやゲームなどが中心にあるのに対して、日系人コミュニティの場合、幅広い分野の、建築、メディア、経営学などを学んでいる若い世代との交流の機会をいただいて、それは大変新鮮でした。先ほど申し上げたように、現在 JICA、HIECC など、大人の交流事業はありますけれど、日本語レベルが非常に高いものが求められているというのがあり、日本語を学ぶためのモチベーションをどう若い世代につけていくのかというのが、現地の日系人コミュニティの中でもテーマになっていると伺いました。そういった動機付けのためにも、学齢期、高校世代前の学齢期における交流は現地の北海道人会の皆さんの、積み重ねてきた苦勞にとっても、北海道の子どもたちの未来にとっても、有効だと思いますので、是非覚書などの締結についても、皆さん方が課題とされている、信頼関係の構築のプロセスですとか、相手国・地域との合意はおそらく得られていると思いますので、覚書などの締結も関係部と連携していただきますよう再度指摘をして質問を終わります。</p>		